この1点



第 26 回

「ブルー・ヌードⅣ」

アンリ・マティス

水彩、木炭、紙　103×74㎝　1952年
オルセー美術館蔵（フランス）
ニース市マティス美術館寄託（フランス）

※令和8年度版高等学校『美術1』表紙に掲載



「ブルー・ヌードⅠ」
水彩、紙　106.3×78㎝　1952年
バイエラー財団蔵（スイス）



「ブルー・ヌードⅡ」
水彩、紙　103.8×86㎝　1952年
ポンピドゥーセンター蔵（フランス）



「ブルー・ヌードⅢ」
水彩、紙　112×73.5㎝　1952年
ポンピドゥーセンター蔵（フランス）

感性の経時変化

まずはどんな衝動からこの作品をスタートさせたのだろう。エロスか、はたまた食っていくためか。いずれにせよ、なんらかの衝動から芸術家は重い腰を上げるわけだけれど、やがて酷似した4作を作り、その全部を発表したというところがなんとも興味深い。

でもそのヒントは時間にある、と僕は思っている。最初の衝動などというものは追っても逃げていくか、さもなければ知らず知らずのうちに自分の手癖に飲み込まれてしまう。マティスはそれでも最初の衝動を追ったのだろうか。

一説には「ブルー・ヌードⅣ」からこの制作は始まり、やがて他の3作にとりかかり、最後にもう一度Ⅳに手を付けていった、とされる。絵画作品と音楽を一緒くたにするつもりはないが、少なくとも音楽を制作時に1テイク目をOKにする人間はまれだ。いや、これは思い描いていたイメージとは違うかもしれない、と2テイク目を録る。これまた違う、となり、何テイクもやって、結局最初のが一番良かった、なんてことになる。それなら最初から1テイク目にしておけば良かったじゃないか、なんて思われるかもしれないけれど、そこに大きく関わっているのが時間なのだ。もう少し説明するならば、自分の中のバイオリズム、もっと言えば美意識の経時変化といったらいいのか。こいつが本当に厄介なもので、極端な話、毎秒毎秒変わっていくものだから、これだ！ と思って作ったものが次の瞬間、あれ？ となるわけだ。自分のせいじゃない。バイオリズムのせい。それが分かってからは、どんなテイクも我慢をして残しておく、ということを学んだ。

マティスは画家だ。音楽よりも多分ずっと長い時間、自分の作品と向き合っただろう。バイオリズムは大きく揺れ、時には途中で作品自体を捨てたくなることもあっただろう。

翻（ひるがえ）ってこのブルー・ヌード4作。描かれている構図はほぼ同じでも、僕にはまるで違うもののように見える。描きたかった芯というか内面が違うのではないか。そこにはバイオリズムの揺れがちらつく。この揺れこそがこの4作の一番の魅力だ、と僕は思う。

このⅣのどこかグロテスクなポーズが最初の衝動に一番近かったものであり、それを一瞬見失い、迷走しながら他の3作を作ったのではないか、なんて勝手に想像をする。全然違っていたらごめんなさい。でも芸術家の、めまぐるしく変わっていく自分の感性と戦っている姿は、誰にでも当てはまるから面白いのだと思う。

松任谷 正隆
まつとうや・まさたか

1951年東京都生まれ。
鍵盤奏者、作曲家、音楽プロデューサー。
1972年より細野晴臣（ほそのはるおみ）、鈴木 茂（すずきしげる）、林 立夫（はやしたつお）と
「キャラメル・ママ」を結成。
その後、アレンジャー、プロデューサーとして、
松任谷由実（まつとうゆみ）、松田聖子（まつだせいこ）、ゆず、
いきものがかりなどのアーティストの作品に携わる。
2024年11月には、松任谷由実が
マティスをイメージした楽曲「小鳥曜日（ことりようび）」を制作、
その編曲を担当した。